⑥アート

アトリエ的な学びがうみ出すもの

（二年次）

1　研究全体テーマと「アトリエ的な学び」の関連

アートの学習は，「アトリエ的な学び」の時空間で成り立つ。安定・交流・追求のステージが行き交う「アトリエ的学びのムーブメント」（平成19年度研究発表要項「アート」参照）からうみ出されるものは，造形表現活動を通じて追い求めていく「自分らしさ」である。自分は，何を欲し，何をどのように表現したいのか。自らの感じ方，考え方，表し方でものをつくり，つくりかえ，つくり続ける行為は，「自分らしさ」を更新し，新たな自分自身をつくり出していく過程とも言えよう。「アート」は，子どもが「からだ全体」で形や色などの外的な世界に向きあい，内的な世界と交信しながら「自分らしさとはなにか」を探り続けることを支える学習分野である。

研究全体テーマの「公共性」を育むうえで基盤になるのが，「アート」で重視する「自分らしさ」だと考える。本校で求めている“多様な価値観が溢れる社会で，民主的社会を築く市民”を「アート」では，まず，自分が何を欲し，何をどのように表現するのかを追求し，かつ自分とは異なる他者をまるごと受けとめながら，共にものごとをつくりだしていく個人と解釈する。ここで「アート」がまず第一に大事にしたいのは，共感的なものの見方や受けとめ方である。「アトリエ的な学び」では，個人が自分自身に向き合うことを阻害されることなく，また個人の表現が批判されたり，優劣をつけられたりすることなく，共感的に受けとめ合うことが前提になる。「自分の（表現・活動）もいいし，友だちのもいいな。それを認め合えるわたしたちっていいよね。」という肯定感を育むことを目指しているからである。子どもが「自分らしさ」を求めることのゴールは，表現活動において自分自身が納得することであり，満足する表現活動をしている自分に出会い，そのことを肯定的に受けとめることである。その全容は，批判や優劣の対象にはなり得まい。したがって「アート」では，一人ひとりの思いや表現のあり方の違いを認め合い，個人が「自分らしさ」に自信を持つことによって，互いにやわらかく受けとめ合う関係性を「公共性」の基盤として確かなものにしていきたい。

2　学習分野「アート」で育成する「公共性」

「アトリエ的な学び」の空間には，一人ひとりの異なる感じ方や思いに基づく異質な表現が混在している。それらが自然に行き交ったり，互いに見合ったりする場の設定において，子どもたちは影響を受けあいながら表現活動を行っていく。そのような「アート」の学習で育成する「公共性」とはなにか。具体的な「リテラシー」を次のように考えた。

－身体性－「個」の出発点として，自分自身が「からだ」で感じることを大事にする。

－自分らしさの追求－表現活動に対する自分自身の思いや考えをもち，「自分らしさ」にこだわる。

－他者の尊重－他者の表現活動および作品などを尊重する。

－共感－表現活動を通じて，相手の思いに向き合い，共感的に受けとめ合う。

－相互交流－それぞれのよさを生かし合いながら互いに刺激し合って高めようとする。

3　授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

上記の「リテラシー」が授業において具体化された子どもの姿を，次に記したい。

実践①－身体性－　「うつろいアートー空を見つめてー」　（実践者：郡司　明子）

【実践概要】６年生　（４時間）
○活動内容：空の色，雲の動きなど，ものごとがうつろっていくさまをからだで感じ，表現の源に出会うとともにつくりかえていく面白さに気づき，つくったものを飾ることによる空間の変化を味わう。
○準　　備：（教師）大画用（半切紙）・テグス
（子ども）水彩絵の具・はさみ・ホッチキス
○学習過程：①屋上にて，自分にとって心地よい場所を決め，心地よいからだのあり方で空を見つめる。
②描きたくなった“時”を自分で捉えて描く。
③描いた絵を好きな形に切って組み合わせ，抽象形をつくる。
④つくった“私の空”を廊下部分に飾って，見合う。

清々しい青空が続く秋。６年生は個々の進学に関することをはじめ思うようにならない現実の課題を抱え，疲れが見えた。こんな時は，大らかに空を見つめてみようと屋上に誘い出した。「居心地のいい場所で空がうつりかわっていく様子を居心地のいいからだで感じてみよう。描きたいな，という思いをつかまえたら画用紙をもらいにおいで。」表現の源に出会うことがねらいである。自分の感覚を頼りに，描く“時”の意思決定を自身で行うことを強調した。ややもすると安易に誰かに同調し，自分の感じ方を大事にできない。公共性の基盤である「自立した個人」を意識し，“自分の時計”で行動するよう促した。

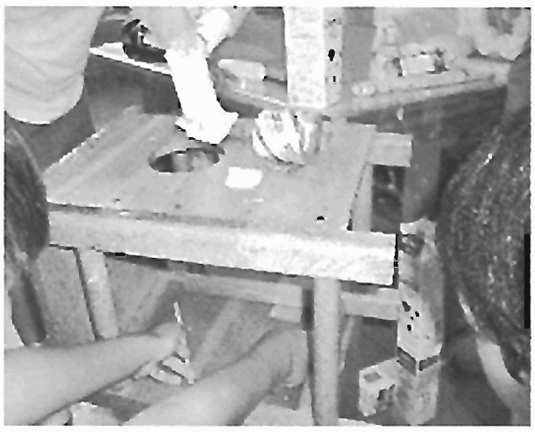
一人ひとりが好きな場所を選び，好きな格好で空を見つめる。仲良しこよしの関係から独りになれない子。陣取った場所を度々変更する子。画用紙を手にして，雲の動きを追いつつ筆を動かす子。仰向けで大の字になってすやすやとうたた寝する子。授業終了時までぐっすりお休みの子もいた。その子いわく「空と一体になった感じ。すっごく気持ちがよかった。」からだで感じたことに正直に，自分のあり方を自分自身で決めたことに価値がある。

空のうつろいと同じく，描いた平面表現にはさみを入れ，ねじる，つなぐ，折るなど手を加えて立体表現に変化させる。“見つめて描いた空”から“私の空”につくりかえて廊下部分に飾った。

表現行為の有無を含めて子どもに委ねることは，教師も勇気と覚悟がいる。行き着く先は子ども自身の意思決定。大空のもと，子どもを大らかに見守った。

実践②－自分らしさの追求－　「音も楽しいビー玉ゲーム」　（実践者：瀧田　節子）

【実践概要】５年生　（８時間）
○活動内容：一人ひとりのものから，多様なよさを生かし合い，つながっていくことの心地よさを感じながら，つくりだす喜びを味わう。
○準　　備：（教師）ビー玉（大・中・小），画用紙，粘着テープ，接着剤，教室環境，ビデオカメラ
（子ども）空き容器など身近にある材料や文房具類，椅子や机など教室にあるもの
○学習過程：①ビー玉ゲームの「音・楽しさ」をイメージしながら材料を集め，自分の考えをもつ。
②材料・場を生かし，試行錯誤しながら工夫してゲームを構成する。
③友だちの考えと交流し，つなげたり影響しあったりすることを心地よく感じながら，つくりだす喜びを味わう。
④自分たちのゲームをビデオ記録する。



導入は「きれいにつくらなくてよい」「出来上がらなくてよい」と伝えることから始めた。まず，「自分の考えをもつこと」を学習の核にしようとしたからである。ある子どもは「前回考えたことをこわした。ころがり方がイメージしていたとおりで，よかった。」と二次でふり返りを書いている。自分の考えをどんどん更新して取り組んだ。

子どもたちは，ビー玉ゲームという共通の課題をきっかけにして，自分と友だちの考えを出会わせた。そして考えをぶつけたり，響き合わせたりしながらよさに気づき，互いを生かし合っていったのである。

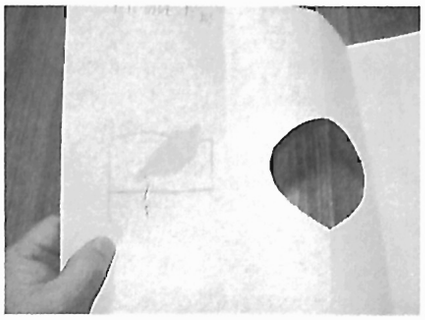
実践③－他者の尊重－　「ふわっと布に色をあつめて」　（実践者：　岡本　薫）

【実践概要】３年生（３時間）
○活動内容：からだで豊かに感じとりながら，進んで活動に取り組み，個人の表現活動すべてを互いに尊重する。
○準　　備：（教師）柔らかくて透ける布，霧吹きスプレーのノズル，クリップ，ロープ，バケツ
（子ども）ペットボトル１～３本，絵の具セット，タオル，アート着
○学習過程：①布とからだで関わり合いながら自分なりのイメージをもつ。
②ペットボトルに色水をつくり布に色を集めていく。
③友達の表現活動と作品を見合いながら交流を深める。
④作品の自由な色や形から発想をふくらませ意見を交流し，互いの表現すべてを尊重しあう。

普段とは違う開放的な学習環境を設定し，不自由さやこうしなくてはいけないという制約の中から解放した。そうすることにより，自分のここち良さの中で意欲を発揮し自分の中から生まれた表現欲求が自然な形の中で表れていくことを願った。子ども達は布のもつ特質をからだで豊かに感じとりながら，自分のこうしたい！という表現欲求にもとづく新しい表現方法から生まれる「自分らしさ」と出会っていった。さらに，色と出会い，様々なことを試し気づいていく中で友だちとの交流が生まれた。友だちと色を交換する子，いろんな友だちの色を集める子，それを混ぜ合わせる子。また，霧吹きスプレーでつけた色が隣の子の布についてしまった時，「やらないで！私の所につくから！」「よくも僕の布につけてくれたな」という様子もみられた。表現の中での友だちと自分の違いを，ぶつけあいながら，受け入れながら互いを尊重していくことにつなげていった。

実践④－共感－　おしっこ大好き！？「わあ，たいへんだあ！」より　（実践者：　辰巳　豊）

【実践概要】２年生　（２時間）
○活動内容：しかけのおもしろさを活かし，楽しい物をつくりだす喜びを味わう。
○準　　備：（教師）画用紙
（子ども）はさみ　カラーペン
○学習過程：①教師の作例をみて楽しいアイディアを考える。
②材料の特性を考えて行錯誤しながら工夫して作品をつくる。
③互いに友達の作品を見合い，感想を述べ合う。
④自分たち生活が楽しくなるような物づくりについて考える。



画用紙を三つ折りにする。そのひとつにくり抜きをつくる。その窓のような所から下に描かれている絵の一部が見える。さて，「これなーんだ！」大抵がびっくりするような物がちらりと見える。「わあ，

たいへんだあ！怪獣だあ！助けて！」見ている相手がびっくりしたところで，おもむろに折ってあるところを開く。「何ーんだ。おもちゃでした」「うふふ」などなど。子どもの発想は微笑ましい。ところが，いました，いました必ずどこのクラスにも。「キャーおしっこ！」オチンチンからしずくが垂れてる！「ダメ，こんなこと描いちゃ！」と言いたくなるのをぐっとこらえて……「ただのレモンだよ！」「ハッハッハッ」大爆笑。中には拍手さえする者もいる。さてさて，ここはまずは大らかなユーモアと受けとめることとした。その後発表会も終盤，どんな作品が楽しいかなと話し合い，授業のまとめをする。件の作品がやはり話題になった。「下品にならないように工夫することが大切だと思います。」子ども達は確かに学んでいる。

4　第71回教育実際指導研究会での授業提案や協議会討議を経て

(1)　部会として授業改善のために目指したことや，そのための手立て

・「アート」で育成する公共性のリテラシーを，身体性／自分らしさの追求／他者の尊重／共感／相互交流の点から考え，授業改善に活かすようにしてきた。

・アートの表現活動においては，子ども達が批判能力を発揮する以前に共感的に受けとめ合うことを基盤にしてきた。

(2)　具体的な成果や問題点

・「アート」で育成する公共性のリテラシーが表れるような授業内容を組むことができた。
しかしながら，そこで目指したいリテラシーが確実に子どもに身につくためには，継続して，どの授業においても５つのキーワードを教師が授業デザインの中に組み込んでいく必要がある。

・共感をベースにした批判能力（「批判」という言葉に変わるアートでもしっくりくるものを探したい）をはぐくむことにも目を向けていきたい。

(3)　協議会での話題・意見・質問など

協議会では，研推でとりあげられた，“Ｂ教諭の学び”について議論が深まった。Ｂ教諭は，「こうしたら，もっとよくなるな」と，アイデアを行き交わせることも大切と記述している。それに対して，アート部の見解を述べるところから始まった。我々はこの言葉に当初，違和感があった。なぜなら，アートはあくまでも個々の学びなので，他の人が「もっとよくなる」という基準は，それぞれに違うはず。「こうしたら……」という部分は，相手に向けるものではなく，「自分だったらこうしたい」というように，仲間の表現活動を見て自分の中にむずむずと湧いてくる表現意欲につなげることに意味がある，と報告した。

協議会では，他の分野と「アート」の学習構造の違いにも話題が及び，さまざまな人の多様な意見が出されて活気あるものになった。その中で，印象深い文言を記しておく。

・「子どもの『思い』は，批判に値しない。」

・「相手の表現を共感的に受けとめながらも，その相手がこうしたい，という思いに寄りそうかたちで「（相手の思いを受けて）～だったら，こういう考えもあるよ。こういう方がいいんじゃない？」と意見することは「あり」ではないか。これを批判能力と呼ぶなら，批判はあり。

・「他者との交流を経たあとで，自分を見つめることを重視して，その指導に時間をかけたい。」

・学校全体を表現の場とすることに関して，アートの行為には責任が伴う。それぞれの立場の違いから出てくる思いの違い。そのやりとりを楽しむところに「アート」学習の面白さもある。

(4)　協議会を経て，今後の課題であると認識したこと

・学校教育の中で，公共空間の中でアートができること，アートが担うことの可能性を追求する。

・「批判」に変わるアートらしい言葉探し。共感をベースにし，相手とは異なる自分の意見を伝え合うことの大切さや学びの可能性に着目したい。